

令和4年度旭川未来会議2030農業分野 第2回分野別会議 会議録

- 1 開催日時 令和4年8月31日(水) 午後6時25分から午後8時40分
- 2 開催場所 旭川市水道局庁舎4階 第2会議室(旭川市上常盤町1丁目)
- 3 出席者(参加者) 鹿野 剛, 川村 さくら, 佐藤 絢也, 佐藤 まどか, 佐野 敏子  
清水 光子, 谷越 亜紀, 野崎 達也, 守屋 大輔  
※敬称略, 五十音順
- 4 出席者(市側) (運営事務局)  
農政部 金次長  
農政課 田中課長補佐, 農政係 山中  
農業振興課 杉山課長  
(統括事務局ほか)  
広報広聴課 中屋課長, 乙坂広聴係主査  
政策調整課 廣岡主査
- 5 会議の公開・非公開 公開
- 6 傍聴者 1名(報道機関:1名)
- 7 意見交換  
議題「米プラスの産地づくりーわたしたちが描く, 2030年のあさひかわ農業ー」について

(1) グループワーク

2つのグループに分かれ, 前回の意見を踏まえながら, 3つの視点(儲かる農業, 見(魅)せる農業, 繋がる農業)ごとに, より具体的な取組について意見を付箋に記入する方法により意見出しを行い, その後, まとめた意見を発表し, 全体で共有。

Aグループ

ア 出された意見

【儲かる農業】

「コスト削減」, 「冬季栽培野菜を強化」, 「収量UP」, 「米を食べる大切さを伝える」, 「お菓子業界とのコラボ マッチング商談会」, 「菓子プラス農作物→特産品づくり」, 「ハネ品の活用(6次産業化)」, 「農家さんに直接収量予測の大切さを説く」, 「冷凍野菜の輸出」, 「食べることのメリットを伝える(集中力UPとか健康になるとか)」, 「さつまいもをつくる ペーストつくれるし…」, 「収穫量の予測をすることで売りやすい!!」, 「ふるさと納税商品開発」

### 【見(魅)せる農業】

「現場を見てもらう」、「インスタでいつもの風景を発信」、「いつもの風景を広報誌に載せる！！1ページか2ページください」、「画家を集めてコンクール(畑に滞在してもらって)」、「米プラス土俵づくり(田んぼで相撲!)」、「休耕地の有効活用でお客様に来てもらう(泥んこ相撲)」

### 【繋がる農業】

「SDGsを意識した包装削減」、「子どもたちの体験」、「米プラス「何か」を作りたい農家さんを増やす」、「スマート農業のさらなる普及」

## イ 発表内容

### 【繋がる農業】

- ・「SDGsを意識して包装を削減」については全員一致で賛同した。
- ・色々な包装があるが、その包装は使ったら捨てる。毎日大量のゴミとなってしまう。
- ・旭川市が、市民みんなが、このことを意識して、早い段階から、変えていくならどのよ  
うなものがよいか、なくすためにはどうしたらいいのかを考え、実行することで、今と  
未来が繋がっていく農業になる。

### 【儲かる農業】

- ・「ハネ品の有効活用」について、どうしても農産品のハネ品が出てしまうのでそれを6次  
産業化でうまく製品化して、ムダをなくす。
- ・時期や気候によって作物の増減が出てきてしまうので、「冷凍野菜の輸出」を考えた。
- ・長期保存できる冷凍野菜の工場などを作り、安定的に出荷することによって、経営面も  
安定する。
- ・さらに冷凍野菜は、いつでも出荷でき、輸出もできるので、日本以外の胃袋が多くある  
国に向けても輸出ができるのでは。
- ・売る側が農家さんと「収穫量を共有」できないと、これからどの程度出荷されるのか全  
くわからず、販売数量の予定を立てにくい。そこを連携し、収穫量の予測を共有するこ  
とで、売れ残るといった無駄をなくしていけるかもしれない。
- ・「農産物を特産品」においては、壺屋さんなど、旭川には銘菓のお菓子屋さんがいっぱいあ  
る。そういったところとコラボした商品を作って、発信をしていく。
- ・そのためには、お菓子屋さん和農家さんは接点がないので、何か、「マッチング商談会」  
みたいなものをして、「地場の農産物を使ったコラボ商品」ができないだろうか。

### 【見(魅)せる農業】

- ・農家さんの作っている作物、その風景は、当たり前だが、実はすごく奇麗。なので、実  
際に来て、見てもらうとすごく感動してもらえと思うので、「実際に現場に来て」もら  
いたい。
- ・その仕掛けとしてインフルエンサーに来てもらい、いつもの風景を撮ってもらい「イン  
スタなどで発信」することで、この風景を見に行きたいと思い、集まってくれるのでは。
- ・「米プラス土俵作り」はちょっと型破りな発想だが、米の産地なので、水田・田んぼがた  
くさんあり、そこで相撲を取ったら面白いのではないかと。

- ・収穫最盛期の9月くらいに、黄金に輝く稲穂が一面の田んぼの真ん中に土俵を作り、そこで相撲を取ったりすると、すごく映えるのでは。そんなイベントがあることで、旭川は米の産地ということを知ってもらえたり、面白いから子どもを参加させたいと話題になったり、もしかしたら大人も真剣に相撲をするような感じになるかもしれない。
- ・画家や絵を描きたい人たちを農家さんのところに集め、みんなで描いてもらい、「コンクール」をする。普段の風景を細部まで観察してもらって描かれることにより、農家自身も新たな発見が生まれ、農業が身近にない人には、変化に富んでいる農村の風景の面白いところが伝わるのではないかと。人を集め、見てもらうことで伝わるのでは。

## Bグループ

### ア 出された意見

#### 【儲かる農業】

「もっと生活に定着したマルシェがあると良い」、「朝ごはん給食があると消費と需要のバランス◎」、「市内の子ども食堂と連携する」、「購入したい人と直接つながるシステムがあると良い」、「米粉の利活用を広げていく」、「1か所に集めることができる工場があれば」、「冷凍食品への旭川野菜の原料供給」、「もっと製粉のコストが下がれば…」、「ハネ品を使った料理教室→キット販売」、「農業生産者のサラリー化」

#### 【見（魅）せる農業】

「物流機能と商品特性を考慮した道内外への拡販」、「見せるのはリアルなストーリーが良い」、「就実ブロッコリー 名前をつけて差別化をはかる」、「農と観光は一緒にしない方が良いのでは」、「移住の人はキラキラしたものを求めている」、「行政が何かひとつテーマを決めてくれると…」、「旭川市全体がひとつになる品目を決める」、「デザイン都市として農業もデザインしたものをアピールしていく」、「空き家を民泊できるようにして」、「農家のホームページを作ろう!」、「農作物のブランド化」、「生産地域のブランド化」、「知ってもらいたいけど、仕事とのバランスがむずかしい…」

#### 【繋がる農業】

「農作物のブランド化」、「生産物のブランド化」、「農協をひとつに…?」、「輸入品の値段が上がっている今がチャンス!!」、「旭川のものは価格が安定していることを知ってもらいたい」、「スマート農業が進むと新規就農のハードルが下がるのでは」、「現状にあったもの（スマート農業）が出てくれば…（電波、規模など…）」

### イ 発表内容

#### 【儲かる農業】

- ・朝ごはんを食べてない子どもたちがいるといった話題から、直売所に出した余り野菜を「子ども食堂」等へ安く提供し、消費してもらう。
- ・他には「生活に定着したマルシェがほしい」、「購入したい人と直接繋がりたい」、「米粉の利用を広げていく」といったようにざっくばらんに意見が出てきた。
- ・まとめると、「生産した農産物を全部販売」できれば、儲かる農業に繋がるのではないかとという結論が出た。

#### 【見（魅）せる農業】

- ・西神楽就実地区で『就実ブロッコリー』という名前をつけて販売しているということから、「名前をつけて差別化を図る」。
- ・知ってもらうために「農家にホームページ」を作ってもらい、作業内容等を発信する。
- ・「農業と観光は一緒くたにしない」、「移住してきた人にはキラキラしたものを求めてほしくない」という意見もあり、新規就農等で地域に入ってくる人たちには、あまり軽い考えでは来てほしくないという主旨の意見もあった。
- ・「デザイン都市旭川として、農業もデザインしたものをアピール」していく必要があり、「空き家とかも民泊できるように活用」しながら、色々な地域の方に農業を見てもらいたい。

#### 【繋がる農業】

- ・未来に農業を繋げていくためにはという考え方の中で、「輸入品の農産物が値上がりしている今は、チャンスがある」のではないか。
- ・「スマート農業等を取り入れ」て仕事の労力を軽減していけないか。
- ・「農協を一つに」という極論もあった。
- ・今日、欠席した参加者の意見で、<旭川市の畑では1品目のみを栽培>というのがあり、少々強引で、極端な発想かもしれないが、「冷凍食品への原料供給」や、それ以外でも、供給する野菜を1品目に絞るところまですると、儲かる農業にも、見せる農業にも、繋がる農業にもなり、実現すると本当に未来が見えるのではないかと個人的にすごくいいと思った。

(2) グループワークを終え、ぜひ、実現させたいもの、優先的に取り組むべきもの等について全体で意見交換。

(参加者)

- ・市の広報誌に、旭川の野菜、お米、そういうものを紹介するページをいただきたい。市内限定になるが、すぐにでもやってもらえる一つかと思う。

(参加者)

- ・広報誌は毎月発行されているので、毎月毎月の生育状況を出していくようなイメージか。それとも単発か。

(参加者)

- ・市内、全部を一度には難しいので、地区別で順番もいいと思う。また、品種ごとの成長過程というのもいいかもしれない。単発でも良い。

(参加者)

- ・作物の美しさやさり気ない一面も伝えられそうだ。

(参加者)

- ・農家の間では、農協のものなど農家の広報をよく目にするが、市内全域となると、他に媒体はないのではないか。

(参加者)

- ・市内の方でも意外と知らない。畑の作物をちょっと映えるような写真で載せていただければよい。それを見て、現地にも見に来てもらえたらいいなと思う。

(参加者)

- ・自分のカフェに来るお客様などに話を聞くと、「農家さんから直接買えたらいい。」「作ってる人があるのを買いたい。」という方がすごく多い。
- ・なので、広報誌でどんな方が何を作ってる、それがどこで買えるのかまで書いてあるといいのでは。
- ・毎月、地区ごと、あるいは、市内農家さん全員を1人ずつピックアップし、誰々さんは〇〇を作っている。どこで買える。という情報が載っていたら、毎月、広報誌を見るのがすごく楽しみになりそう。

(事務局)

- ・直売所について、直売所マップというものをホームページに掲載している。また、グリーン・ツーリズムガイドブックにも情報が掲載されている。

(参加者)

- ・ホームページ自体が見にくい。
- ・情報発信の方法にもっと工夫ができるのでは。

(参加者)

- ・目に付くような場所への掲示や、情報のQRコード化、若い世代も見やすいようなT i k T o kなどのSNSなど。

(参加者)

- ・SDG sを意識した包装はやれたらいい。ミニトマトとか葉物野菜で取り組めるだろうか。

(参加者)

- ・これから野菜生産組織の中で取組の話をしようかと思っている。
- ・国としても、時代的にも、そういった風潮になっていくと思うので旭川市として生産者が先行的にやっていくのがいいのでは。
- ・ただ、先進的にやると、失敗する可能性というリスクがあるので、そこは、市にサポートしていただきたい。
- ・例えば、従来の包装のミニトマトとSDG sに配慮した包装のミニトマトがどちらも1パック100円で販売されていたら、SDG sに配慮した包装の方を手取る人の方が多いと思う。
- ・やはりそういう取組を市として先進的に取り組んでいきたいという思いがある。

(参加者)

- ・ほかに付きまとうのは、鮮度の問題である。スーパーに並んでいるのは特殊なフィルムで包装されたものだ。
- ・SDG sに配慮したパッケージになった時にその鮮度の問題とか、色々クリアしなくてはならない問題が多くあると思うが、それでも先頭に立って取り組んでもいいのかなと思う。すぐできそうというか、優先的に取り組み始めていいのでは。

(参加者)

- ・トマトなどは個包装ではなく、箱・コンテナなどに詰めバラ出荷することがよくあり、最終的にはスーパーのバックヤードでパック詰めされ、それが販売されてる場合が多いと想定される。
- ・市と農家さんの協力体制はできると思うが、やはり、スーパー等の販売側とも共通認識を

持っていかないと。

(事務局)

- ・数年前に量り売りの実証実験を行ったことがあり、葉物野菜で効果はあった。
- ・農業者の作業負担は減るが、直接、儲けに繋がるというわけではない。
- ・もしかすると、量り売りの方が販売価格が高くなることも予想され、それでも皆さんが買うぐらいの社会的な認識を共有していく必要がある。

(参加者)

- ・エコやSDGs, エシカルなどに関しては、これからの消費者を教育していく必要があると思っている。買う人の意識を変える、育てていくということは、どうしてもセットにしていかなければと思う。
- ・そうすると、マルシェや直接買うということとなると包まなくていい。
- ・銀座商店街でお店をやってるが、商店街では包んでないものがすごく多く、お店に行き、そのままのものを買い、お客さんが自分の袋に入れて帰る。
- ・買い物カゴを持って買い物に行き、包まれてないものを買うということをはやらせたいと思っている。
- ・お店側としてもそういう売り方をオススメしたり、その方が素敵だと思うことも含めデザイン都市に繋げていきたいと思っている。

(参加者)

- ・意識改革。意識も大事、消費者やそれぞれの意識。

(参加者)

- ・我慢とかはよくない。SDGsのために我慢とかではなくて、それが素敵なことであるとか、よく感じられるように、それが当たり前に見えるよう意識を変える必要がある。

(参加者)

- ・SDGsについては農協の女性部でも勉強してるが、それぞれどの程度理解しているのだろうか。

(参加者)

- ・日本は遅れているという認識。日本のやり方は何かキャンペーンのように一時的にやってるように感じる。

(参加者)

- ・野菜を買っても多くて使い切れず余してしまい、腐らせてしまうというのはよく聞く話。売れるのはうれしいが、食べられず捨てられるのは悲しい。

(参加者)

- ・今は多く入っている方が売れるという時代ではない。必要な分だけを欲しがっている。

(参加者)

- ・直売でも南瓜など、そのまま1個では売れない。カット南瓜が売れる。

(参加者)

- ・日本は綺麗すぎる。テレビで見かける海外のスーパーの野菜売り場はフィルムにも袋にも包まれず、そのまま陳列されている。SDGsへの意識が違うように思う。

(参加者)

- ・海外は大きさバラバラなものがドサッと山積みされていることもある。そこまでいくと規格

という概念がいらなくなりそうだ。

(参加者)

- ・消費者が求めている。しかし、「全て売れる」と考えた時には、規格はない方がいいのかもしれない。

(参加者)

- ・規格は販売場所や買う人の都合によるところが多い。規格がなくなることによって農家は出荷する作業が軽減されると思うが、規格ごとに値段がつくことを考えると、規格がなくなってしまうことにより、販売価格が一律になり、収益が低くなってしまう可能性がある。

(参加者)

- ・販売価格が下がっても、選果場の利用料を払わなくなるなど、悪いことばかりではないかも。

(参加者)

- ・例えば、サイズ違いのトウキビが一緒くたに売られていると、同じ値段なら大きいものを選んで買われることが多く、後から買いに来た人が、小さいサイズのものしかないので買わないということもあり、規格があることで売れ残りを抑えることもある。

(参加者)

- ・規格があるのには理由や背景が複雑にあるので、近々というのは難しく、時間がかかる問題だろう。

(参加者)

- ・規格だったり、ケースがあることによって生まれている雇用がある。選果場がいなくなったり、パック詰めする人を雇わなくなるなど雇用機会を奪ってしまうことになるのか。

(参加者)

- ・そのような人たちは、みんな作り手になってもらう。
- ・人口が減っていくことを考えると、人手の確保は難しいだろうから。

(参加者)

- ・人手不足で言えば、今はコロナも重なり、パートさんの急な休みなどで、野菜はあるのに選果できず、出荷できないということも問題になっている。

(参加者)

- ・今すぐは無理でも、2030年、さらにはもっと先の未来へ向け、意識を少しずつでも改革していくというのはすごくいい。
- ・時間はかかるかもしれないが、繋がる農業の位置づけということでよい。

(参加者)

- ・旭川の人が旭川のもを食べればいい。旭川産のピーマンと熊本産のピーマンがどちらも並んで売られているのが変だなと思う。

(参加者)

- ・食べ比べるのにはいいとは思う。
- ・外国産と国産、道外産と道内産、他の地域産と旭川産、より地元に近いものに手が伸びると思うが。

(参加者)

- ・同感であるが、外国産が安く売られていることが多い。

(参加者)

- ・外国産は安いし、量も多いが自分は買わない。
- ・子育て世代の人も子どもの安全など、色々なことを考えた時に地元のものを手に取ると思う。

(参加者)

- ・理解するが、子ども食堂をやっていると、なかなか思うようにできないことも多い。運営上、安い方を買わざるを得ないこともある。

(参加者)

- ・そういう事情があるのであれば、やはり、我々が作ったものの中でハネ品であるとか、出荷はできないが新鮮で美味しいものを安く提供できるのでは。
- ・そういう機会や場があれば、子ども食堂などを運営している人たちに貢献できると思う。

(参加者)

- ・横浜の方にある、海外、特に東南アジア等からの輸入品を保管しておく倉庫へ、5年程前に視察研修の一環で行ったことがある。保管倉庫といっても、クーラーなどの空調があるわけでもなく、かなり劣悪な環境に大根などがそのまま置いてあるのだが、特殊処理されていて腐ったりせず、驚くほど長い時間、そこで保管されている。その食材がコンビニ弁当などになり、自分たちの口に入っているという事実がある。
- ・聞いた話では、日本は地場の作物には非常に厳しい反面、自給率が低い現状があり、国内と同じような厳しい基準にすると輸入品が入ってこなくなるので、海外のものには基準を低くしているのだそう。こういう実態があっても公表されない。

(参加者)

- ・そういった話を、国産品はちょっと高くても安全だということをもっと伝えていければと思う。

(参加者)

- ・そのものを買って食べないが、色々な加工品とか、調理されたものの中に入っている。

(参加者)

- ・グループワークでも話したが、農家さんが教えてくれる料理教室などで、そういう選び方も農家さん発信で言ってくれれば、割とすんなり理解できるのではないだろうか。料理教室の先生が言うのではなくて、作ってる人が国外から入ってくるものは心配だとか、商品の裏の表示を見て選ぶとよいということ。

(参加者)

- ・地元の人たちに地場のものを手に取ってもらおう取組など、食べてもらうにはどうするかという取組を考えてもいいかも。

(参加者)

- ・儲かるのは二の次じゃないか。やっつことに興味があれば繋がると思うので、繋げるのも二の次かなと思う。そうなるを見せることが大事ではないか。やはり、情報の発信等は旭川市として少なく、弱く感じる。
- ・旭川市は農協単位で分かれてしまう。農協が分かれているから、それをまとめるというのはすごく難しい話。ただ、そこをどうにかすればいいのかなと思う。

(参加者)

- ・農業者の方の意識の問題だろうか。

(参加者)



- ・もしくは、旭川市が大変だけど、市に先陣を切ってもらおうとか、どっかで何かをしないといけない。一番は生産者が考えることだが。

(参加者)

- ・まずは目の前に今、新米の収穫があるので、これをアピールしない手はないと思う。日本人にとって新米っていうのはまだ特別な意味があると思う。価値があるというか。

(参加者)

- ・自分も旭川市民で、この会議に出たりして、なにか盛り上げたいなと思っている。その中で、農業分野で何ができるのだろうと考えている。それは何かと言われると出てこないのだが、もっと盛り上がっていったらと思う。
- ・いいものを作ってくというのが仕事だが、せっかく旭川でやってるから、旭川をもっと盛り上げたいという思いがある。

(参加者)

- ・やはり、ここは、田んぼに土俵ではないか。これは、盛り上がる。

(参加者)

- ・泥んこ相撲とかいいかもしれない。

(参加者)

- ・米農家さんには少々、申し訳ない話だが、稲を植える時に、丸くその場所だけ植えないで置き、空いているそこを土俵のようにする。そこで相撲を。周りの畦とかには、足場などの台があって、上がって観覧できるような。

(参加者)

- ・田んぼアートでやっても面白そうですね。
- ・恩返しできるようなこと、そんなのができたら面白そうだ。

(参加者)

- ・田んぼアートは終わったら収穫して食べるのか。

(参加者)

- ・食べられるところは食べて、食べられないところは飼料になっている。

(参加者)

- ・そういうことも一般の人は知らない。

(参加者)

- ・難しいが、盛り上がるのはやはり、イベントなんかを打つしかないのだろうか。このご時世は厳しいだろうが。

(参加者)

- ・やり方をちょっと工夫すればできるのかもしれない。
- ・計画や準備に時間はかかるだろうが、市から農協などにも声かけしてもらい、農業祭など。
- ・そういう形であれば、旭川産の農産物や畜産物をみんなに知ってもらえる気がする。イベントが一番分かってもらいやすい。話もできて、買ってもらって、食べてもらって、全てできる。

(参加者)

- ・2030年に限った話ではないが、食育、食べる大切さというのを伝えることはずっとやっていかなくてはいけないと思う。

- 朝ごはんを食べない人たちが、例えば、茶碗1杯、おにぎり1個でも食べるようになれば、米の消費が増え、少なからず儲かる農業に繋がるかなと。
- そして、食べないと集中力も続かないし、仕事の生産性も上がらないと思う。大げさかもしれないが、生産性が上がり、集中力が高まって、仕事に精が出れば、日本のGDPも上がるみたいな、そういう可能性も秘めてると思う。食べることはすごく大事。
- 行政も、市場も、みんなでやっていかなきゃいけないと思う。